

第 43 回 歯 科 衛 生 研 究 会

平成 27 年 7 月

講 演 抄 録 集

日 時 / 平成 27 年 7 月 15 日 (水) 午後 6 時

会 場 / 日本歯科大学新潟生命歯学部アイヴィホール

日本歯科大学新潟短期大学

歯科衛生研究会

会 長 又賀 泉

副 会 長 池田裕子、宮崎晶子

実行委員長 今井あかね

副実行委員長 小菅直樹

企画運営委員 中村直樹、浅沼直樹、高橋正志、石山巳喜夫、佐藤律子、
三富純子、土田智子、元井志保、平野恵実

庶務連絡委員 佐藤治美、筒井紀子、菊地ひとみ、煤賀美緒、坂井由紀、
吉富美和

事務担当委員 熊木由美子

[一般口演・口演者の方へ]

- 1) コンピュータで投影をする方は、発表データのUSBフラッシュメモリー
またはCD-Rを持参して下さい。
- 2) 当日 14 時 00 分～16 時 00 分に、コンピュータ投影テストおよび予備のノ
ートパソコンへのデータの保存を行ないますので、都合の良い時にデータ
を持って会場にお越しください。
- 3) 一般口演の発表時間は 8 分（予鈴 7 分で青ランプ、終鈴 8 分で赤ランプ）、
討論時間は 4 分です。
- 4) その他のお知らせ事項は、当日受付で致します。

第43回 歯科衛生研究会プログラム

日時 平成27年7月15日(水) 18時00分～19時06分

会場 日本歯科大学新潟生命歯学部 アイヴィホール

<18:00-18:03>

「開会の辞」 会長 又賀 泉

一般口演

座長 山崎 明子

<18:03-18:15>

1. N短期大学卒業生勤務先に対するステークホルダー調査

○菊地ひとみ、宮崎晶子、佐藤治美、三富純子、筒井紀子、佐藤律子、浅沼直樹、小菅直樹
(新潟短期大学)

<18:15-18:27>

2. ヒトの永久歯の象牙質の組織発生にみられた進化過程の痕跡

○高橋正志¹、後藤真一²、森 和久³、又賀 泉¹
(¹新潟短期大学、²新潟生命歯学部理工学講座、³新潟生命歯学部口腔外科学講座)

<18:27-18:39>

3. 平成26年度歯科治療技術・材料グループ活動報告

～歯科材料管理の5Sラウンドチェック結果報告～

○松田知子、内山美幸、古厩かおり、藤田浩美、松岡恵理子
(新潟病院歯科衛生科)

座長 松岡 恵理子

<18:39-18:51>

4. 平成26年度 歯科衛生科におけるインシデント報告の集計と検討

○土田江見子¹、池田裕子¹、澤田佳世¹、本間浩子¹、戸谷収二²、佐野公人³
(¹新潟病院歯科衛生科、²新潟病院口腔外科、³新潟生命歯学部歯科麻酔学講座)

<18:51-19:03>

5. 研修後アンケートからみる今後の現任研修会の方向性の検討

○佐々木典子、小林えり子、片桐美和、拝野敏子
(新潟病院歯科衛生科)

<19:03-19:06>

「閉会の辞」 副会長 池田 裕子

ポスター展示

P 1. 不織布ディスプレイザブル舌清掃器具の舌苔除去効果の検討

○煤賀美緒¹、土田智子¹、宮崎晶子¹、佐藤治美¹、筒井紀子¹、元井志保¹、菊地ひとみ¹、
佐藤律子¹、大森みさき²、両角祐子³、佐野 晃⁴、佐野健二⁴

(¹新潟短期大学、²新潟病院総合診療科、³新潟生命歯学部歯周病学講座、⁴デンタルプロ株式会社)

P 2. ラット耳下腺腺房細胞の開口分泌に対する低分子量Gタンパク質 Rab33A の関わり

○今井 あかね^{1,4}、辻村 麻衣子^{2,3}、吉江 紀夫²

(¹新潟短期大学、²新潟生命歯学部²解剖学第2講座、³先端研究センター、⁴生化学講座)

<p>N短期大学卒業生勤務先に対するステークホルダー調査</p>
<p>新潟短期大学 ○菊地ひとみ、宮崎晶子、 佐藤治美、三富純子、筒井紀子、 佐藤律子、浅沼直樹、小菅直樹</p>
<p>【目的】 本学では社会に貢献する歯科衛生士を養成するため、定期的にステークホルダー調査を実施している。平成 19 年度の調査では、接遇やコミュニケーション能力の不足が指摘された。そのため、接遇演習で基礎を構築した後、病院体験実習やケアコミュニケーション演習などの臨床に基づいたカリキュラムの導入を試みた。本調査では、改善策として新科目を導入した結果、それがどのように卒業生へ反映されたか、その教育効果の評価を目的として実施した。</p> <p>【対象および方法】 調査対象は、平成 21～25 年度までの新卒歯科衛生士勤務先 192 機関であり、調査票を郵送し返信用封筒にて回答を得た。調査票は平成 19 年度「短期大学ステークホルダー調査票」を一部改変したもので、調査内容は歯科衛生士採用についての項目、本学卒業生に対する知識・技能・態度の評価、今後の教育カリキュラムで充実を望む項目など 10 項目である。</p> <p>【結果および考察】 調査票の回収率は 53.6%であった。歯科衛生士採用において最も重視するところは、「性格」であった。今後の教育カリキュラムで充実を望むことは、「コミュニケーションの基本姿勢」、「SRP」、「口腔ケア」の順であった。また、本学卒業生の能力を 5 段階評価した平均を前回と比較すると、知識 3.7→3.7、技能 3.5→3.6、態度 3.8→3.9 であった。以上の結果から、新科目導入後、態度面での変化はわずかに見られたものの、コミュニケーション能力向上のためのカリキュラム構成や態度教育の難しさが分かった。しかし、勤務先によっては教育だけの問題ではなく、コミュニケーションを得意・不得意とする個人差が影響していると指摘する意見もあった。今後は、個人の資質に応じたコミュニケーション技法修得の指導が必要である。</p> <p>【結論】 今回の調査では、新科目を導入したが教育効果として反映されず、態度教育の難しさや教育内容のさらなる見直しが必要であることが分かった。今後もステークホルダー調査を継続し、社会からのニーズを見据えた教育内容を検討していきたい。</p>

<p>ヒトの永久歯の象牙質の組織発生にみられた進化過程の痕跡</p>
<p>新潟短期大学 ○高橋正志、又賀 泉 新潟生命歯学部 後藤真一 新潟生命歯学部口腔外科学講座 森 和久</p>
<p>【目的】 ヒトの永久歯における外套・中層・深層象牙質の組織構造と元素組成の違いについて検討し、組織発生にみられる進化過程の痕跡について考察した。</p> <p>【材料と方法】 抜去後、ただちに 10%中性ホルマリンで固定したヒトの永久歯の頬舌側方向の研磨標本を作製し、偏光顕微鏡で観察した。同一標本を NaOCl で脱有機して、定法により S-800 型走査電顕（日立）で観察した。HCl で腐蝕した象牙質の研磨面、および NaOCl で脱有機した歯根が少し形成された段階の矯正抜歯された智歯の象牙質の固形の形成面を同様にして走査電顕で観察した。未咬耗歯および高齢歯の無処理の研磨標本の、咬頭部・歯頸部・根尖付近部の表層・中層・深層象牙質の元素の重量比率を、JXA-8900 型 EPMA（日本電子）で定量分析した。</p> <p>【結果】 外套象牙質では象牙細管が、多数の細かい枝に分岐しているように、偏光顕微鏡下で観察された。脱有機した研磨面では、外套象牙質で象牙細管が細く、基質が少し多孔質に、中層象牙質で象牙細管が太く、基質が緻密に、走査電顕下で観察された。外套象牙質の最表層の形成面には直径数 μm の顆粒状構造物がみられ、これが外套象牙質中に埋め込まれていくように観察された。この顆粒状構造物は、イモリの歯足骨およびヒトの齶蝕による修復象牙質の形成面にみられたものに類似していた。未咬耗歯の外套象牙質では中層象牙質よりも、Ca・P の含有率が低く、C・Na の含有率が高かった。O の含有率は、高齢歯よりも未咬耗歯で高かった。高齢歯では、すべての部位・層で、未咬耗歯よりも Mg の含有率が高かった。F の含有率は全体的に低く、一部の部位・層で高かったが、明瞭な傾向はみられなかった。</p> <p>【考察】 Ca・P・C の含有率から、外套象牙質は中層象牙質よりも石灰化度が低く、有機物の含有率が高いと考えられる。高齢歯では象牙細管中にマグネシウムフィトロッカイトが形成されるために、未咬耗歯よりも Mg の含有率が高いと推察される。ヒトの象牙質の組織発生では、最初に、下等脊椎動物の象牙質の段階の前に、歯足骨のような、骨と象牙質の中間段階が存在する可能性が示唆された。これは象牙質の進化過程（系統発生）を反映していると思われる。</p>

平成 26 年度歯科治療技術・材料グループ
活動報告（歯科材料管理の 5 S ラウンドチェック
結果報告）

新潟病院歯科衛生科 ○松田知子、内山美幸、
古厩かおり、藤田浩美、
松岡恵理子

【目的】歯科治療・材料グループでは、平成 25 年 4 月より、5 S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）活動の支援をしている。各部署には、本グループで作成したセルフチェック票に月 1 回の評価を行ってもらっている。グループとしては、各部署をラウンドしチェックを行っている。ラウンドによる評価の結果から、今後の支援について検討を行ったので報告する。

【方法】歯科衛生士が配属されている 8 部署を対象に材料グループメンバーが 5 S に沿った 10 項目の評価を行った。評価のフィードバックは各部署の歯科衛生士 1 名に対し口頭で行った。ラウンドの機会は年度内に 2 回とし、平成 26 年の 9 月に 1 回目と 6 カ月後の平成 27 年 3 月に 2 回目を行い、2 回の評価を比較検討した。

【結果】多くの部署で 5 S 活動による良い傾向がみられた。‘材料の保管状態が整然としているか’では、1 回目で「悪い」が 1 部署あったが、2 回目ではなくなった。‘ライトアーム・3way・引き出しの清掃’では、1 回目で「やや悪い」が 2 部署あったが、2 回目ではなくなった。‘冷蔵庫内の清掃をしているか’では、1 回目から 2 回目で、「やや悪い」の 1 部署がなくなり、「やや良い」が 2 部署から 5 部署に増えた。一方で、「良い」が 5 部署から 3 部署に減少した。その他の項目では、ほとんどの部署が 1 回目ではほぼ良い状態だったが、「やや悪い」が 1~2 部署あり、2 回目でも改善がみられなかった。‘不要在庫が区別されているか’では、1 回目で評価を行わなかった部署が 5 部署あった。2 回目では評価を行わなかった部署は 1 部署となった。

【考察】1 回目より 2 回目では、おおむね改善傾向がみられた。項目によっては、「やや悪い」となっている状態からの改善はみられなかった。これは、部署ごとの患者数、スペース、診療内容、マンパワーなどの条件の違いによると考えられた。今後の活動としては、評価基準の設定、良いと評価された現場で実践されている方法の確認、改善しなかった現場の原因追求、改善策の提案、効率的なフィードバック方法の検討が考えられる。また、セルフチェックによる自己評価とラウンドチェックによる他者評価を比較・分析して、各部署に効率的かつ具体的な方法を提案していきたいと思う。

平成 26 年度 歯科衛生科におけるインシデント報告の集計と検討

新潟病院歯科衛生科 ○土田江見子、池田裕子
澤田佳世、本間浩子
新潟病院口腔外科 戸谷収二
新潟生命歯学部歯科麻酔学講座 佐野公人

【目的】歯科衛生科のワーキンググループ活動の中で、我々リスクマネジメントグループは平成 26 年度の短期目標を「対策案をもとに、消毒・滅菌に関する事例を減らす」をかかげ、活動を行った。平成 26 年 4 月から平成 27 年 3 月までに、歯科衛生科へ提出されたインシデント報告書を集計し、インシデント事例に変化があるか検討を行ったので報告する。

【対象】日本歯科大学新潟病院歯科衛生科 30 名

【方法】インシデント報告書を、①体験項目別、②当事者の所属別、③発生場所別、④発生時の状況別、⑤月別、⑥曜日別、に集計し検討を行った。

【結果】インシデント報告数は 57 件であった。（平成 25 年度 42 件）①体験項目別で件数が多い項目は、「受付での処理の不備」15 件、「診療後処理での不備・注意不足」12 件、「診療前準備の不備・注意不足」9 件であった。②当事者の所属別では、平成 26 年度より在宅往診チームが「訪問歯科口腔ケア科」となり、報告件数が平成 25 年度は 0 件であったのに対し、9 件と増加した。③発生場所別では、多い順に「受付」28 件、「消毒室」10 件、「診療室」8 件、「ユニット」7 件であった。④発生時の状況別では、「普通」29 件、「やや多忙」19 件、「余裕あり」7 件であった。⑤月別では、最も多いのは「5 月」12 件、次いで「10 月」10 件であった。⑥曜日別では、「月曜日」と「木曜日」が 14 件ずつ多かった。

【考察】「消毒・滅菌に関する事例」は減少したが、「受付業務に関する事例」が増加した。その中で、患者誘導時の患者確認方法については、病院全体として対策案が検討され、平成 27 年 4 月より統一した患者確認方法が実施されている。このように、提出されたインシデント報告書は、まず各小委員会で対策案が検討され、病院全体として対策が必要な事例は、リスクマネジメント部会で検討される。インシデントを報告することによって、より安全かつ適切な医療を提供する体制の確立に繋がることを、教職員および臨床実習生・病院実習生が理解し、インシデントが発生した時は積極的にインシデント報告書を提出することが大切であると考え

研修後アンケートからみる今後の現任研修会の方向性の検討

新潟病院歯科衛生科 ○佐々木典子、小林えり子
片桐美和、拝野敏子

【目的】患者が病院や医療スタッフへ期待していることは、確実な医療技術はもちろんのこと、スタッフのマナーも重要なポイントとなっている。患者サービス向上グループでは、H26年度の現任研修で、患者満足につながるために必要なスキルを習得するための「ホスピタリティコミュニケーション講座」を開催した。今回私たちはこの研修会が実務に活かされているのかを調査し、より患者満足につながる活動の一助として検討した。

【方法】対象は、本院歯科衛生科26名。方法はアンケートとし、1回目を研修会直後、2回目を研修会終了4ヶ月後に行った。1回目は研修会に参加した20名を対象とし、2回目は歯科衛生科全員の26名を対象とした。ただし、2回目のアンケートで研修会に関連する問いに、受講しなかった6名は回答していない。

【結果】研修会直後のアンケートでは「研修は大変有意義であった50%・有意義であった50%」、「ホスピタリティコミュニケーションの理解が大変深まった50%・深まった50%」との回答が得られた。また研修会4か月後に行ったアンケートでは「研修会の内容を覚えている35%・なんとなく覚えている60%・あまり覚えていない5%」、「研修内容は日常の業務に大いに活かしている10.5%・活かしている89.5%」との回答が得られた。

【考察】全体を通して、コミュニケーションスキルの理解が得られ、また実務でもある程度活かされている有意義な研修会が開催できたと考えられる。一方で、研修会直後は大多数が今後の業務に活かそうだと意欲的に感じているにもかかわらず、実際は大いに活かせたと感じている者は10.5%にとどまった。このことから、実際の実務で活かすのは難しく、活かせたといい実感がもてない結果に終わってしまったと考えられる。また研修会直後は、講義と参加型の研修形態を90%がよいと評価していたが、時間があくと、23.1%が講義のみでよいとの回答になり、少数ではあるが資料配布のみで十分との意見もあった。しかし、エクササイズを取り入れた項目は、研修会が終わった後も記憶に残る率が高く、実戦で活かす機会も高くなると考えられる。今後、研修の内容に合わせた研修会形態を考え、受講者が興味を持ってなおかつ実務で活かせるように工夫する必要があると考える。

<p>P1 不織布ディスクポーザブル舌清掃器具の舌苔除去効果の検討</p>	<p>P2 ラット耳下腺腺房細胞の開口分泌に対する低分子量 G タンパク質 Rab33A の関わり</p>
<p>新潟短期大学 ○煤賀美緒、土田智子、宮崎晶子、佐藤治美、筒井紀子、元井志保、菊地ひとみ、佐藤律子 新潟病院総合診療科 大森みさき 新潟生命歯学部歯周病学講座 両角祐子 デンタルプロ株式会社 佐野 晃、佐野健二</p>	<p>1) 新潟短期大学 ○今井あかね^{1),4)} 2) 新潟生命歯学部解剖学第二講座 辻村麻衣子^{2),3)}、吉江紀夫²⁾ 3) 新潟生命歯学部先端研究センター 4) 新潟生命歯学部生化学講座</p>
<p>【目的】 われわれは <i>in vivo</i> による、不織布を用いたディスクポーザブルタイプ（以下不織布タイプ）の舌清掃器具の、舌苔除去効果および使用感を他の舌清掃器具と比較し検討したので報告する。</p> <p>【材料・方法】 使用した舌清掃器具は、ブラシタイプ、スクレーパータイプおよび不織布タイプの 3 タイプである。対象は事前調査で舌苔付着の認められた一般ボランティア 12 名（男性 11 名、女性 1 名、平均年齢 40.9 歳）とし、比較の組合せにより、不織布タイプ VS スクレーパータイプ 6 名（A 群）、不織布タイプ VS ブラシタイプ 6 名（B 群）に分けた。対象者には実験開始 24 時間前より舌清掃を中止させ、1 日 1 回同時刻に 5 ストロークずつ、舌を正中より二分し、左右側異なる舌清掃器具にて舌清掃を実施させた。実施期間は 5 日間とし、実験前後には舌の写真撮影を行った。以上の手順を 1 クールとし、左右の使用器具を入れ替えて合計 2 クール実施した。また各クール終了時には各種舌清掃器具の使用感に関する質問紙調査を実施した。舌苔付着量の評価は、清掃前後の画像から、WTCI を変更したものをを用いて行った。</p> <p>なお、本研究は日本歯科大学新潟短期大学の倫理委員会における倫理審査の承認を受けている。</p> <p>【結果・考察】 A・B 群共に清掃前後の WTCI 平均値の差に有意差は認めなかった。一方、使いやすさにおいては不織布タイプがやや劣る傾向にあった。これは、柄の短さや使用時の組立て作業の手間が原因と考えられた。しかしながら、柄が長いために思わず奥まで入りえずくといった意見もスクレーパータイプやブラシタイプで挙がった。</p> <p>【結論】 今回の <i>in vivo</i> による実験でも、不織布タイプの舌苔除去効果は、他の舌清掃器具とほぼ同程度であった。しかしながら、使用感については各々の特徴が現れる傾向が見られた。これらのことから、舌苔付着量や技術や状況などを考慮し、対象者に合った物を処方できるよう、われわれが各タイプの特徴を熟知すべきであると考えられた。</p>	<p>【目的】 我々はこれまでラット耳下腺腺房細胞におけるいろいろな Rab タンパク質の機能を明らかにし、アミラーゼが分泌されるまでの細胞内膜輸送にどのように関わっているかを調べてきた。近年、Rab33A がラット副腎髄質クロマフィン細胞由来の PC12 細胞において神経ペプチドの分泌に関わっていると報告された。そこで、今回は耳下腺腺房細胞中の Rab33A の局在を明らかにし、アミラーゼ分泌を指標として、Rab33A が開口分泌に関わっているかを調べた。</p> <p>【方法】 10 週令 Wistar 系雄性ラット耳下腺腺房細胞より mRNA および細胞膜画分を調製し、RT-PCR および Western blotting を行った。Rab33A、VAMP2 および GM130 抗体を用いて免疫組織化学を行った。また Rab33A 抗体、GST 融合 Rab33A TN (GDP 型) および Rab33A QL (GTP 型) リコンビナントタンパク質をストレプトリジン O (SLO) 処理した膜透過性腺房細胞に導入し、イソプロテノール (IPR) 刺激時のアミラーゼ分泌を測定した。</p> <p>【結果】 RT-PCR および Western blotting の結果、Rab33A が耳下腺腺房細胞に発現していた。免疫組織化学の結果、Rab33A と VAMP2 (分泌顆粒膜のマーカー) および一部 Rab33A と GM130 (ゴルジ装置のマーカー) が共局在していた。SLO 処理した膜透過性腺房細胞からの刺激時アミラーゼ分泌実験において、GST 融合 Rab33A TN を腺房細胞内に導入した場合に約 20~30% の抑制がみられた。さらに抗 Rab33A 抗体を用いても同様のアミラーゼ分泌抑制が観察された。</p> <p>【考察】 耳下腺腺房細胞において Rab33A は分泌顆粒膜およびゴルジ体に存在しており、抗体および不活性型 (GDP 型) Rab33A 導入によりアミラーゼ分泌が抑制されたことから、Rab33A が開口分泌に関わっていることが示唆された。</p> <p>本研究は東北大学大学院・生命科学研究科の福田光則 博士との共同研究によるものである。また、科学研究費補助金[基盤研究 (C) 24592820 および 15K11063]により行われた。</p>

次回の「歯科衛生研究会」は平成 28 年 3 月 9 日に開催する予定です。
多数の講演の申し込みをお待ちしています。